

DISCOVERY

シコク発見

矢野 将文
YANO Masafumi株式会社 今治・夢スポーツ
代表取締役社長米田 博文
YONEDA Hirofumi

四国財務局長

特別対談 矢野社長 × 米田局長

今治発の挑戦 スタジアムに「365日の賑わい」を

2023年1月にオープンした「今治里山スタジアム」。全国でも珍しい民設民営のスタジアムで、サッカーの試合をする場所にとどまらず、様々な事業で人を呼び込む「持続可能なスタジアム」を目指し、進化を続けています。

地域でサッカースタジアムが果たす役割とは？地元サッカーチーム・FC今治とスタジアムを運営する(株)今治・夢スポーツという企業が大切にしているもの、そして矢野社長の思い描くスタジアム像とそれにかかる思いを取材しました。

⚽ 「手触り感」のある仕事

米田局長：四国でも様々な企業がありますが、スポーツというジャンルでのチャレンジは珍しいですよ。社長は愛媛県ご出身ですが、以前から地元に関わっていたのですか？

矢野社長：前職は証券会社勤務でしたので、地元どころかむしろ日本国外を向いていましたね。退職する前の3年ほどは証券化商品を扱う仕事をしていましたが、仕事を続けるうち、一番肝心の「買い手にとっての商品の価値」をわからないまま商品だけを売り続けている、ということに気が付いたのです。リーマン・ショックを経て証券会社を退職し、次はそういう手応えや実感といった、「手触り感」のある仕事がしたい、そう思って地元に戻ってきました。

米田局長：そんな時に岡田会長(元サッカー日本代表監督)とのご縁があったと。

矢野社長：そうですね。愛媛に戻ってきて農業や林業に携わり、それを本格的に仕事にするのかどうかを考えている時に、たまたま岡田会長と共通の知り合いである学生時代の先輩から声をかけてもらいました。サッカーは昔からやっていましたが、スポーツを仕事にしたかったというわけではなく、本当に偶然のご縁です。

企業理念

次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを大切にする社会創りに貢献する

ミッションステートメント

1. 社員に始まり、より多くの人たちに夢と勇気と希望、そして感動と笑顔をもたらす続けます
2. 多様な人が集まり活気ある街づくりに貢献します
3. 世界のスポーツ仲間との草の根の交流を進め、世界平和に貢献します
4. 地球環境に配慮して事業活動を行います

物の豊かさより、心の豊かさを

米田局長：企業理念を見ると、スポーツにとどまらない広がりを感じます。矢野社長をはじめ、社員の皆さんも色々な思いで集まってきているのではないかと思います。

矢野社長：はい。もちろんサッカー自体が好きの方も多のですが、当社の企業理念で掲げている「次世代のため、物の豊かさより心の豊かさを大切にする社会創りに貢献する」という考えに共感して来る方も多です。

米田局長：実際にお仕事を続けてみてどうですか？

矢野社長：がむしゃらにやるという点では前職と変わりませんが、違いがあるとすれば、大きく分けて二つあります。

一つは、仕事が仕事として成り立つのかどうか決まっていな、ということ。

例えば証券会社の営業という仕事においては、商品を作る人、値付けする人、そしてそれを売る人…といったように全てに担当がいて、それぞれが決まった仕事をプロとしてこなしていれば良いですよね。しかし、今の仕事ではそうはいきません。ゼロからのスタートなので、例えばある要望に対して、それに答えることが仕事になるのかどうか判断するところから始まります。

二つ目の違いは、あらゆる人がお客様だということ。

先ほどの証券会社の例では、投資家、つまり特定の人を見て仕事をしていましたが、今の仕事では違います。フットボールクラブの運営会社は地元を丸ごと背負うような側面がありますので、元々サッカーやスタジアムに関わりがない人たちに関わってもらうにはどうしたら良いかを考えなければなりません。

そういう意味では全ての人がお客様、ステークホルダーであり、あらゆる人の方向を見る必要があります。

360度では不十分なので、もう「450度外交」ですね。



矢野社長 × 若手職員①

社員はやはり今治市の方が多ですか？(村上)

選手を除いた社員数は約60名、そのうち今治市出身の方は10名程度です。当初は今治の比率が高かったのですが、採用を増やしていった結果、市内外から色々な方が来てくれるようになりました。ご家族で移住する方もいるので、今治市の人口増加に貢献しているかもしれません(笑)。



矢野社長 × 若手職員②

愛媛県にはFC今治のほか愛媛FCもあり、どちらもホームが愛媛県であることから、その直接対決は毎回盛り上がりです！(吉村)

そうですね。両チームで最高の舞台を作ろうという思いから、愛媛FCとの試合を「伊予決戦」と名づけています。もちろん試合の時は真剣勝負ですが、共に愛媛のサッカーを盛り上げていきたいという思いは一緒ですね。



事業展開の具体例①

教育/
次世代育成
EDUCATION



今治市・しまなみ海道から発信するインキュベーションプログラム

Bari Challenge University
パリチャレンジユニバーシティ

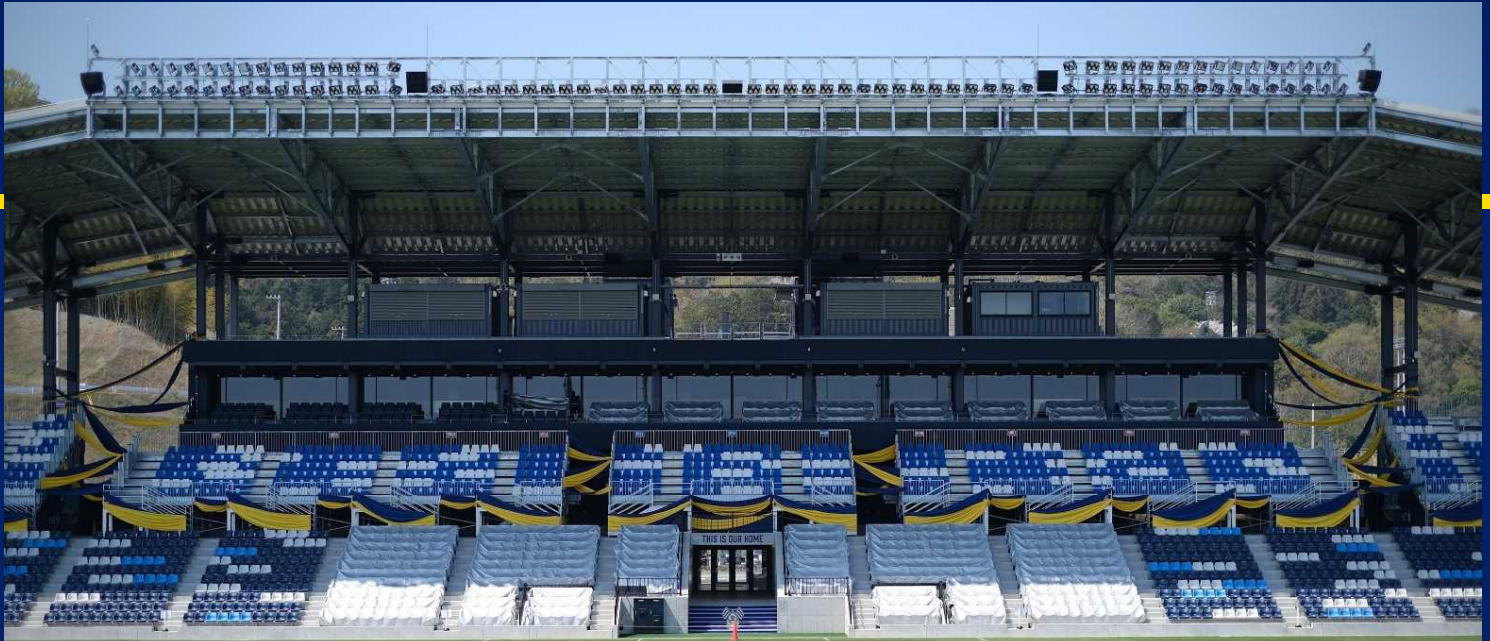
岡田会長を学長に、FC今治アドバイザーボードが教授として参画する、「社会変革者の輩出」を目的とした取組み。全国・海外から今治市に若者が集まり、社会が抱える問題とその解決策を議論していくワークショップを開催している。

米田局長：なるほど。クラブ運営会社の経営者ともなると、企業としての存続だけではなく、地元に対しても関わりが強い、責任の重い仕事だと思います。

矢野社長：そうですね。また、仕事において大事にしているものという点でも、証券会社とは全く異なります。かたやお金儲け、かたや次世代のための社会創りですから。

お金というわかりやすい目標ではなく、企業理念で掲げる「心の豊かさ」って何だろう？というところから始めて、次の世代により良い社会を残すためにはどうしたら良いかを考えるのでは、かなり視座が違ってくると思います。スポーツという文脈で、教育分野、健康分野で事業展開していますが、それこそノウハウがないので手探りですね。みんなに喜んでもらえるならやってみよう、そんなスタンスで続けています。

🍀 2023年1月オープン!「今治里山スタジアム」



今年できたばかりの「今治里山スタジアム」。全体を海賊船に見立て、ピッチを「デッキ」と呼ぶなど、いたるところに船や海に関する名前が付けられている。客席はユニットスタンドになっており、最大で15,000席を配置できる。



今治里山スタジアム

■Address 愛媛県今治市高橋ふれあいの丘1-3
■Website <https://satoyamastadium.com/>



(写真左)年間契約で企業や個人が利用する部屋「SUITE」のテラスには15席の特別シートがあり、試合を上から観戦することができる。(中央)選手たちのロッカールーム。試合前には青のLEDライトが点灯される。(右)試合時に監督やコーチが作戦を練る部屋は「CABIN」と呼ばれ、今治市の離島の名前が付けられている。

🍀 地域の「ハブ」として

米田局長： サッカーを通して地域と関わる中で、様々な地域課題に直面されたかと思います。地方における課題は全国的に共通のものも多いですが、今治市ではどうですか？

矢野社長： 今治は12市町村が合併した自治体なので、例えば年中どこかでイベントが開催されているというように、各主体がバラバラに動く傾向があると思いますね。核になるメンバーがたくさんいるのに、分散してしまっていると思います。その点、私たちにできることとして、サッカーを通して地域の繋ぎ役、「ハブ」になれるのではないかと考えています。例えば造船業界と医師会が関わる機会は賀詞交歓会など僅かしかありません。それが「FC今治を応援する」ということについては立ち位置が同じであり、サッカーという共通言語で関わり合うことができるのです。



地域の繋ぎ役、「ハブ」というキーワードがありましたが、実は財務局内でもよく使う言葉なので親近感があります。自治体や地域金融機関など様々な地域主体と財務省・金融庁を繋ぐ地域のハブとしての役割を果たせればと思っています。

私たちも一部公的なものを背負っているという感覚はあります。民間企業ではありますが、地域の方が期待することに地域のハブとしての要素もあるなど。「FC今治を応援する」という共通項、「今治里山スタジアム」に地域の方が集うことで共創が生まれればいいですね。



事業展開の具体例②

プロジェクト： 健康事業 PROJECT



健康意識の向上や運動習慣の定着をテーマに、今治市や関係企業と協働し、体力測定や健康プログラムを実施。今治里山スタジアムでも健康をキーワードにした取組を更に進めていく予定。



矢野社長 × 若手職員③

愛媛県といえば坊っちゃんスタジアムがありますが、里山スタジアムはサッカー以外で毎日来ることができるスタジアムを目指していることに驚きました。(山本)

運営主体が公か民かという経営面での違いがありますが、私たちはこの里山スタジアムを、企業理念を実現する場所として位置付けています。この企業理念により、サッカーに限らず様々な事業で「365日の賑わい」を作るというコンセプトが生まれました。



「365日の賑わい」をつくる

矢野社長： 現在、サッカーの試合数だけで言えば、年間19回ほど。それだけでは運営が成り立ちません。スタジアムが持続可能であるために、様々な事業で市内外から人を呼び込んで「365日の賑わい」を実現し、収益を確保することが必要です。365日という一見大変そうですが、大いなる社会実験と捉えて取り組んでいますね。現在の周辺事業はカフェとドッグランだけですが、そうしたスモールビジネスの積み重ねの中で共感してくれる企業が現れることもあります。



一民間企業が地域のことを全て背負うのは難しいですが、民間ならではの自由さもあると思います。日本のスタジアムはほとんどが自治体所有で、民間が自前で建設しているところはほとんどありません。

建設費を返済しながらの運営は大変ですが、自己所有がゆえに制限がなく、自分たちのやりたいようにできるというメリットがあります。

肩肘張らず、自分たちができることをやっていく。

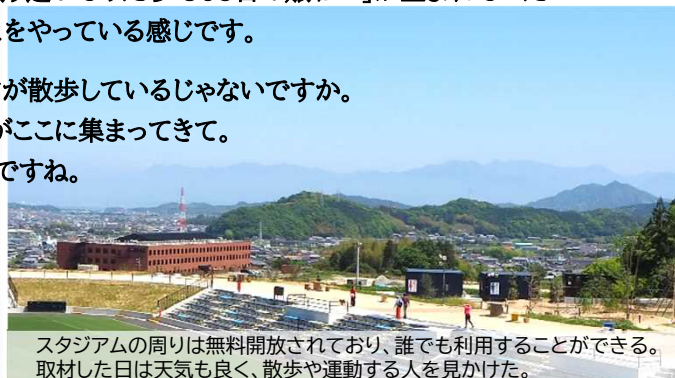
小さいけれど確かなものを積み上げていく。

その流れの中で振り返ってみたら「365日の賑わい」が生まれていた——
そういうようなことをやっている感じです。

今そこで地元の方が散歩しているじゃないですか。

なんとなくみんながここに集まってきて。

こういうのが理想ですね。



スタジアムの周りは無料開放されており、誰でも利用することができます。取材した日は天気も良く、散歩や運動する人を見かけた。

※掲載内容は2023年5月現在のものです。



取材を終えて…

日々目の前の課題に対応しながらも、常に企業理念に立ち返って考える。取材中、その姿勢を目の当たりにし、企業理念の大切さを実感しました。

(松山財務事務所 総務課・村上 龍一)

「心の豊かさを大切にする社会創りに貢献する」という企業理念のもと、サッカーだけではなく、教育や農業など様々な活動に挑戦されている姿に感銘を受けました。

(松山財務事務所 財務課・吉村 卓留)

スポーツを絡めた賑わいづくりにむけ、スタジアム内外での工夫がたくさんありました。サッカーだけではなく、日常的に人々が利用できる施設にしたいという熱い思いが伝わってきました。

(本局 管財総括第2課・山本 大輔)



取材企業情報 株式会社 今治・夢スポーツ
■Address 愛媛県今治市高橋ふれあいの丘1-3
■Website <https://www.fcimabari.com/>